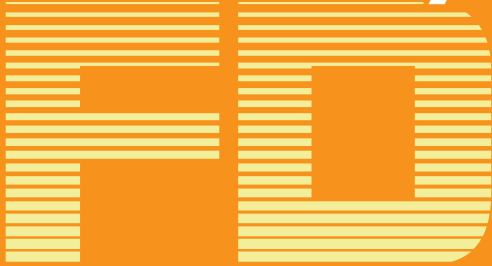


Toyo University



FACULTY DEVELOPMENT

News 第8号

発行／東洋大学FD推進センター

Contents

FD推進センターの活動方針	p 1
各部会活動方針	p 2
平成23年度 ティーチング・アシスタント FD研修会	p 3
平成23年度 新任教員FD研修会	pp.4～6
他大学との交流「第6回関東圏FD連絡会」	p 6
社会学部におけるFD活動「初任者研修」	p 7
第1回学長フォーラム	p 8
TOEIC指導者向けワークショップ	p 9
学外FD関連研修会参加レポート	pp.10～11
FD推進委員会 活動状況報告	p 12
FD推進委員会 活動計画	

平成23年度 FD推進センター活動方針

FD推進センター長 神田 雄一



本学における全学的なFD活動も平成19年度から本格化し、平成20年12月にはFD推進センターを設立、活動基盤づくりの過渡期を脱して新たな展開期を迎えています。周知のように昨今の大学を取り囲む環境は非常に厳しく、特に教育に関しては「学士力」あるいは「社会人基礎力」といった言葉に代表されるように学生に必要な学力を身に付けさせ、社会に送り出すことが重要な課題となっています。

これに伴い、教育の質の保証と向上を目指した質保証システムの構築が求められています。本学においては教育の質の保証と向上の視点から、教員のみならず職員さらに最近では学生をも含めたFD活動が展開されていることはFDに対する意識の高さをものがたるものでありましょう。

このようなことから本年度は「組織的なFD活動の展開」を目指して、大きく二つの活動を中心としたいと考えております。その第一は、授業評価アンケートへの対応です。従来、授業評価アンケートの実施主体は、「自己点検・評価委員会」で行っていましたが今年度より新たに「自己点検・評価活動推進委員会」が新たなミッションで活動することとなり、授業評価アンケートについてはFD推進委員会が引き継ぐこととなりました。授業評価アンケートは各学部で多くの努力を傾注して実施していますが、その結果を教員や学生にフィードバックする仕組みが必ずしも機能せず、教育改善にうまく結びついていないとの反省から、これらの課題を前進させるために、本年度は検討のための組織である「授業評価手法検討部会」を設置しました。

今一つは、全学的なGPA導入への対応です。学生の修学意欲の向上のためにGPAを教育の質保証のための全学的な共通指標あるいは学部毎の学修指導指標として用いることは、すでに多くの大学で実施しており、国際的にも質保証のパフォーマンス・インデックスとして用いられております。本学における国際化は教学改革推進プログラムの一環でもあり、早急なGPA導入を図りたいと考えております。

さらにFD活動の「見える化」を推進し、情報公開を進めるとともに、他大学との情報交換も積極的に実施する所存です。FD活動の実践を通して、教育の質の保証と向上を図ることが本学の教育理念を実現する大きなドライビング・フォースになるものと考えております。東洋大学のFD活動にさらなるご理解とご協力をお願いいたします。

各部会活動方針

「ゆとり教育の時代と大学教員の研修」

研修部会長 宮原 均

私の学生時代、教員が、大教室で一方的に学問を論じ、その内容も講義の方法も、完全に担当者にゆだねられ、学生も、1回の期末試験で合格することに集中し、授業への出席を大事にしようとは考えなかった。その反面、単位取得、卒業、就職は自己責任との意識が強かった…もちろん、これは私の印象にすぎないが、こうした傾向はあったと思う。しかし、少子化、大学全入、ゆとり教育の現実においては、学生に対する大学教職員のかかわり方は大きく変わらざるを得ない。従来の考え方を改め、意識改革を行わなければ、大学として生き残ることはできないが、そのポイントとして、どのような学生が入学しているか、の認識が重要である。幸いなことに東

洋大学の学生の多くは、まじめで明るく素直であるが、現在・将来の自分の事を、自分で考え、実行していく、という点にやや消極的である。そこで、教職員が、いくつかの見やすいルールを敷き、学生には、ルールの選択とその流れに乗っていく努力を求めていくのが現実的な方向である。教員は、文字通り教師としての役割を充実させ、職員は一人ひとりの学生の立場に配慮することが求められている。その上で、研究者としての、又は組織全般のシステム構築の活動を行うことが求められ、悩む事も多くなる。研修部会ではこうした、ある意味で別方向の任務を強いられる教職員の負担の軽減・効率化にも役立つプログラムを提供していきたい。

「大学院部会長の悩み」

大学院部会長 福森 文康

“大学院生(院生)の研究指導においてFD活動を行う”-この命題にどう取り組むかを悩んでいます。FD活動は、大学および研究科の理念・目標に基づき、教員の教育内容や方法を改善及び向上するために、組織的に取組まれるものです。大学院におけるFD活動は、学部在先立って義務化され、本学においても、ここ数年にわたり各研究科及び法科大学院において、院生の求める教育内容・指導方法・施設などについての把握に努め、具体的な解決策を打ち出し、一定の成果をあげてきました。さて、FD活動を教育内容全般で行うのであれば、院生の研究指導においても、改善及び向上が求められていることになります。しかし、研究指導には組織的な活動が立

入るのは難しいと思います。大学院では、独創的な研究の遂行を促すことが求められ、個人の特性に応じた指導がより強く求められるため、画一的な指導プランは有効でない場合があります。文系では教員と院生は独立した研究者であり、また、専門性の高さから複数の教員による指導を受けにくい場合もあるでしょう。そのため、活動が可能な領域であるシラバスについて、改善できるかを検討しようと思っています。例えば、院生の学位取得のための研究指導の手法・内容をキーワードなどにより具体的に示すことで、研究者情報データベースの教育・研究活動のものと併せて、より多くの判断材料を入学希望者や院生に伝えるのはどうでしょうか？

「授業改善対策部会の活動に関連して」

授業改善対策部会長 堀口 文男

授業改善については、FD活動の中でも最も重要な課題といえます。特に、部会では、授業改善事例を広く教職員の皆様に広め、改善の一助としていただくために、事業改善事例シンポジウムを行っておりますが、例年出席者が少ない状況が続いております。ご自分の授業やほかの用事のために出席できない事情もあると思います。しかし、発表者やFDスタッフ関係者を除くと、一般の参加者はほとんどいないのが実態です。これを改善するには、魅力あるシンポジウムとすることが第一の改善策として考えられ、この観点から今年のシンポジウムでは、皆さんに関心を持ってもらえる話題としました。今回のテーマは「携帯電話を授業に生かす工夫」と

「ToyoNet-ACEの利活用について」です。これに詳しい方の講演を予定しています。ぜひ、これらの講演に参加いただき、皆様の授業に生かしていただけたらと考えています。また、11月26日(土)に開催する今年の授業改善事例シンポジウムでは、研修部会との合同により、一般教員FD研修会も同時に行いますので、皆様方の興味に応じて参加いただけるようにしております。

また、これだけでなく経済学部中国語の教員の方による授業参観も予定しておりますので、こちらのほうもぜひ参加いただきたくお願いいたします。これらの活動が少しでも皆様の授業改善に役立つことを願っております。

「授業評価手法検討部会について」

授業評価手法検討部会長 長谷川 勝久

授業評価手法検討部会は、今年から立ち上がったばかりの部会です。教育環境で最も重要な要因の一つが授業であると考えます。授業をよくするためにはどうすればよいかという視点から、全学共通の授業フィードバックアンケートの項目およびフィードバックの方法について検討していくことが主な活動です。現在、先生方のご協力のおかげをもちまして、授業をよくするための要因を見

出す作業に入っております。今後、自己の改善点が明らかにでき、次年度以降、改善ができたかどうかができるようなフィードバックシステムの開発に取り組んでいく予定です。まずは、学生を第一に考え、私たちの活動が、学生にとって意味あるものになるよう努力していきたいと思っています。

「編集部会長としての所信表明」

編集部会長 幸田 浩文

平成19年4月、現FD推進委員会の前身であるFD委員会は、「研修部会」「大学院部会」「授業改善対策部会」「教員表彰部会」の4つ部会を組織し活動を開始しました。そして同年5月16日には、①FDハンドブックの作成、②FDニュースの編集・刊行、③FDに係わるWEBページの作成を目的として、各学部・大学院研究科から選出された7名の委員からなる「編集部会」が新設されました。その後組織再編などを経て今日に至りますが、本部会では、その間年2回のFDニュースの編集・刊行を継続する中で、平成21年3月にはFDハンドブック、平成22年8月にはTAハンドブックを刊行してきました。

本年度は、例年通りFDニュースを年2回刊行することの他に、

①FD推進センターの活動報告書の刊行と②FDハンドブックの改訂版の編集・刊行が活動計画として加わりました。とくに②の編集に際しては、部会長の私を除く全委員が入り替わりましたが、現委員による新たな視点で初版の改訂に現在章構成・執筆予定者の段階まで漕ぎつけたところです。

FD委員会が「教育活動の継続的・組織的改善の推進と支援」を旗印に活発に活動を続けてきたとはいえ、各学部・研究科などによってその進捗状況がまちまちであり、またFDの主旨・目的・内容などがまだまだ全学に十分に伝わっていないのが現状です。本委員会では、ニュースや刊行物を通じて、FD活動に貢献できるよう努力したいと考えています。

平成23年度 ティーチング・アシスタント (TA) FD研修会

開催日時：平成23年4月16日（土） 14：00～16：30

場 所：白山キャンパス6号館6210教室

本学における継続的な教育改善への取り組みの一環として、平成20年度よりTAを対象にしたFD研修会を実施しております。今年度は、前回好評であったグループワークを充実させ、TA同士が業務における課題や役割・悩み等について、ともに学び合い解決策を見出す機会となりました。FD推進センターが刊行した『TAハンドブック』をテキストとして活用し、今年度初めてTAとなった約140名のTAを対象に開催しました。

開会挨拶	神田 雄一 (FD推進センター長)
第Ⅰ部 講演会	
「TA制度の目的、東洋大学のTA制度、TAの役割」	幸田 浩文 (編集部会長)
「教員の立場からTAにのぞむこと」	福森 文康 (大学院部会長)
第Ⅱ部 グループワーク、発表・質疑応答	
総括・開会挨拶	神田 雄一 (FD推進センター長)

研修会プログラムは2部構成(前半はTAの役割や責任について一層理解を深めることを目的とした講演会形式、後半は13のグループに分かれて意見交換をするグループワーク形式)で行いました。

開会に先立ち、神田FD推進センター長より開会挨拶があり、東洋大学の教育理念やFDの定義、大学院におけるFDとTAの関係などについて説明がありました。

第Ⅰ部は、はじめに、幸田教授より「TA制度の目的、東洋大学のTA制度、TAの役割」について講演がありました。TAは単なるアルバイトではなく、重要

な役割を担っており、学生も教員もTAを信頼しているので、教育補助業務について正しく理解し、担当科目の予習・復習や担当教員との十分なコミュニケーションをとることが大切である点が強調されました。また、TA業務の具体的な役割・内容や、円滑に業務を遂行するために必要な留意点(ハラスメント、個人情報扱い等)などについて説明されました。

続いて、福森教授より「教員の立場からTAにのぞむこと」と題する講演がありました。TAにのぞむ3つのこととして、①教員のパートナーとして授業を運営すること、②学生に対してメンターと

しての役割を果たすこと、③自発的に自己能力の向上を図ること、を挙げ、具体的にどのようなにはたらきかけるべきか、について話されました。

第Ⅱ部では、13のグループに分かれてグループワークを行いました。グループワークでは、「疑問に思っていること・不安・悩み」「志すTA像」等について意見交換をするとともに、学生への対応方法について、授業形態に応じた具体的な状況をイメージしながらケーススタディを行い、その後、グループごとに発表をしました。

最後に、神田FD推進センター長より総括・開会挨拶がありました。グループワークの総括を行うとともに、「グループワークの報告を聞いて、TA業務を真摯に取り組んでいる様子が伺えて心強く感じた。学生とのコミュニケーションの取り方、指導方法などについては、教員も同じように懸命な教育活動を日々行っているのだから、教員と一緒に議論をすすめ、困ったこと等があれば一人で悩まず相談してほしい」と述べました。

●研修会欠席者への対応

グループワークシートに取り組んだ後、当日の収録映像を視聴しアンケートに回答する課題を設けました。資料等はFD推進支援室にありますので、閲覧等ご希望の方はご連絡お待ちしております。

●アンケートの声

- 教育補助員としての心構え、業務内容、役割、位置づけが理解出来、責任感がもてた。
- 担当教員から言われたことをするだけでなく、自ら学生とコミュニケーションをとることも必要であると感じた。
- 学生への質問にすぐ答えを教えていたが、TAの役割を理解してどのように対応すればよいか学べた。
- 理系/文系でグループを分けてワークを行ったことで、実務的な悩みや課題を共有し、解決することができた。



幸田編集部会長



福森大学院部会長



グループワークの発表

平成23年度 新任教員FD研修会

日 時：平成23年6月11日（土）14：00～17：30

場 所：白山キャンパス6203教室

●プログラム

開会挨拶 学長 竹村 牧男（文学部教授）

講演「東洋大学におけるFDの取組み」	神田 雄一（FD推進センター長）
先輩授業実践事例① 「生徒の能力に応じた教育法」	グリーン ハロルド スティーブン （法学部企業法学科講師）
先輩授業実践事例② 「講義の目標設定と達成度」	山川 聡子（理工学部機械工学科准教授）
グループディスカッション、グループディスカッション内容の発表・質疑応答	
総括・閉会挨拶	宮原 均（研修部会長）

新任教員FD研修会が、今年は6月11日の午後に行われた。新しく東洋大学に同僚としてお迎えした先生方に、早く新しい環境に慣れていただくと同時に、今までに培われた様々な知識・経験をお話していただくという趣旨である。もう少し早い4月に実施したほうがよいという意見もあったが、着任後2カ月間の経験を踏まえた研修の機会とするため、この時期に開催した。また、非常勤でご出講いただく先生方にどのような形で参加いただくか議論したが、出席の負担を考慮し、自由参加とした。

研修会の構成は、①東洋大学におけるFDの取組み方、②先輩教員による授業実践例、③グループディスカッション、④懇親会の4つ全体の司会進行：掘口授業改善対策部会長である。

FDの取組みについては、神田センター長に、東洋大学の現状を踏まえた上

で、その課題と特色あるFD活動についてご講演いただいた。

次に先輩教員の授業実践について、文系・男性教員のグリーン先生が、学生の能力に応じた英語の授業について担当された。出席者を学生に見立て、模擬授業のスタイルで行われたため、臨場感あふれ、なおかつ、学生時代の緊張感を思い出させる内容で好評(nice work!)であった。

理系・女性教員の山川先生は、データを駆使したFDの実践についてお話しされた。認識、目標、実施、成果、課題について、単なる思い込みではなく、数値・客観化された資料に基づいて実践され、大いに刺激になった。グループディスカッションについては、数名ずつ5チームに分かれ、FD委員がファシリテーターとして参加するほかは、新任の先生方の自主的な議論にゆだねられた。事前アンケー

トで上位に挙げられたテーマである学生のマナー、成績評価基準、多人数講義の3について自由に意見を述べ、各グループで報告レポートにまとめていただいた。

ほとんどが面識なく、様々な経歴、そして他学部所属の先生同士の顔合わせで、最初は少しぎこちなさがあったが、これらがかえって議論を新鮮・活発にしており、貴重な提言も多くあった。ディスカッションの内容について各グループから簡単な発表・質疑応答を行った後、総括・閉会とし、懇談会を行った。比較的出席者が多く、ここでも学部をこえた懇談がなされ好評であった。

最後に、この研修会の欠席者に対するケアであるが、研修会の録画映像を視聴したうえで、主として研修会プログラムについてのアンケートにお答えいただいた。

報告 研修部会長 宮原 均



グループディスカッション



宮原部会長

講義の目標設定と達成度 ～理工系の授業の例から～

理工学部機械工学科 准教授 山川 聡子

5年前から、専門分野である「制御工学」の講義を担当しています。制御工学は国内外のほとんどの機械系学科で教えられる科目です。学生達が社会に出て他大学出身者と一緒に仕事をすることを考えれば、細かな部分は省略してでも基本と全体像は理解して欲しいと思っています。そこで、①板書は要点を絞る、②勉強を持続させるために試験は中間と期末に分けて行う、③積極的にレポート課題を出す、などを心がけて講義に臨みました。

その結果、1年目は8割以上が合格点に達し、おおよそ予定通りの達成度が得られました。この結果に安心して翌年以降も同じ内容と方針で講義を続けました



が、年々合格率が下がってしまいました。授業の進行スピードを落としたりしましたが、効果はありませんでした。3年目が終わる頃には、さらに達成目標を下げて講義のスピードを下げるか？しかし、これ以上目標を下げていいのだろうか？という葛藤が生じていました。

ところで、この頃、担当していたプロジェクト型の実習科目で受講者にアンケート調査を行いました。この科目は学生の学ぶ意欲をひきあげることを目的とし、1～3年生のセメスタごとで難易度の異なるプロジェクトを企画・実行させる内容でした。

2008年4月に、3学年185名に対して無記名のアンケート調査を行った結果を図に示します(詳細は、工学教育Vol.57、No.2参照)。学年が上がるにつれて課題が難しくなっていましたので、大変だと答えた比率が上がっているのは当然だと思います。

注目すべきは、一連のプロジェクトを完了した3年次では、楽しかった、やって良かったと感じている学生も増えている点です。大変だったので楽しくなかった、良くなかったと感じた人はごく

少数であり、むしろ、困難な課題をやり終えることで達成感を得たようです。

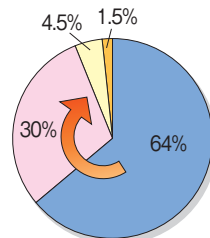
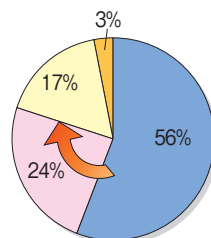
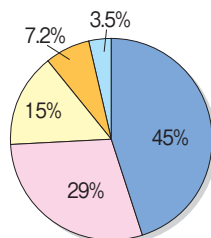
この結果から、講義科目についても目標を落とさないことにしました。しかし、学生の達成度が低くはいけませんので、前述の①～③に加えて、④要点・補足事項をまとめたプリントを配付し、⑤毎回、授業中に簡単な演習を解かせ、間違いは指摘することにしました。これ以外の要因もあるかもしれませんが、合格率は回復してきています。

これまでの経験から、講義の目標は受講者がある程度は大変だと思う内容であることが良いと考えています。プロジェクト型科目を担当した経験から、教員は質問に対応できる体制を作り、学生の努力を積極的に褒めることも大切だと感じています。また、個人的な感想ですが、学生の達成度が上がれば教員としても嬉しいものです。学生も私自身も満足感を得られるような講義ができるように努力していきたいと思っています。

以上、私見ではありますが、紹介させていただきました事例が少しでも皆様のご参考になれば幸いです。

大変だったか？

- とても思う
- まあまあ思う
- どちらでもない
- あまり思わない
- 全く思わない

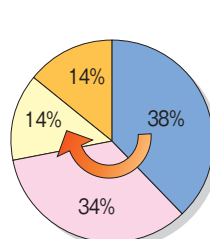
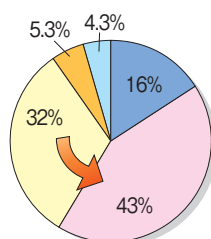
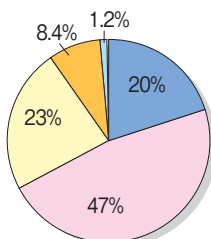


2年終了時は
大変と思う人が多く
「楽しい／よかった」
の比較は少なめ

プロジェクトの途中

楽しかったか？

- とても思う
- まあまあ思う
- どちらでもない
- あまり思わない
- 全く思わない

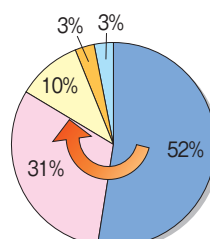
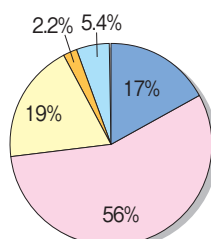
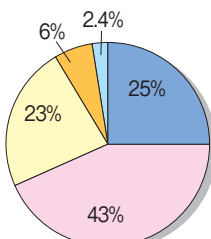


3年終了時は、さらに
大変と思う学生が、
増えたが、楽しかった
よかったも増えた

プロジェクト終了
で達成感！

やって良かったか？

- とても思う
- まあまあ思う
- どちらでもない
- あまり思わない
- 全く思わない



1年終了時

2年終了時

3年終了時

図：工学部機能ロボティクス学科「プロジェクト研究」に関するアンケート結果

生徒の学力に応じた教育法

法学部企業法学科 講師 グリーン・H・スティーブン

英語の学力が低い学生、やる気がなく、授業に対しても非常に消極的になっている学生に、教師としてどのようにアプローチすればよいだろうか。

私が授業の中で実践しているのは次の3点である。

まず、英語の授業に出席する学生の心理に注目した。

彼らは英語で表現をすること、とくに人前で話すことをとても恐れているのだと思う。間違えはしないか、人に笑われはしないか、そのことによって自分が傷つき自信をなくすのではないかと常に案じているのだと思う。この不安を取り除き、自信を少しずつつけさせることが必要だ。

まず、授業の始めには、その日の授業目標をはっきりと説明することにした。ゴールは学生にとって達成しやすいもの、しかし学生の能力を少し上回るものを設定する。少しの努力によって達成できるという自信をつけさせるためだ。

そして授業の終わりには、「自己評価シート」に各自で記入してもらう。

これは学生にゴールが何であったかを確認し、目標を達成したかどうかを自分で確認してもらうためのもので、一人一人に授業参加は自分の責任であるということを認識してもらいたいという意図がある。

第2に、学生同士が学び合う仕組みを取り入れている。

大勢の学生の前で、一人で英語で表現するというプレッシャーを軽減するには、ペアワークやグループワークが有効だ。これらは一人一人の発言を増やし、互いに学び合うという利点も持ち合わせている。協力しても分からない場合は、教師に遠慮なく質問することを奨励している。

第3に、教師はこのような学生の努力を積極的に褒めることが必要だ。

どのような英語を表現したかに注目せず、授業中の努力を評価するのである。

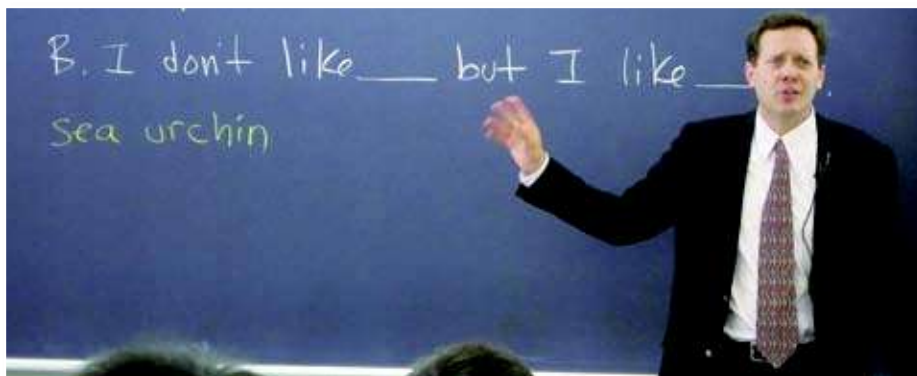
学生が授業中発言したりした時には、“かっこいい”“かわいい”スタンプをシートに押して、全員の前で評価をする。始めは自分自身、「これは大学生には子供っぽく、あまり効果もないのではないか」と思っていたのだが、予想に反して学生には好評である。褒められたという証拠がノートや配布物に残り、学生は評価を再確認できるのが良いようだ。

また授業の最後には、“Nice work!”と全員に呼びかけ、またペアやグループの中でも互いに“Nice work!”と呼びかけてもいる。

教師の私が授業に遅れて来たときのことである。どのクラスの生徒も静かに勉強して待っていた。上記のような枠組みを作ってから、学生が授業に前向きに取り組むようになり、また何とか自分なりに英語で表現しようとする姿が見られるようになったと思う。

最後に、私の授業には参加ルールがある。授業中、携帯電話を使っていたり、眠っていたりした場合は、教室から強制的に退去である。授業への参加率を成績の50%に設定しているため、学生にとってはこのルールは厳しいものとなっている。

英語でコミュニケーションできる真の力を身につけるために、自信をつけさせ、学生同士で学び合う授業が付け焼き刃的なものでないようにしたい。学ぶ姿勢が授業後も、また卒業してからも続くような効果を与えたいと願っている。



他大学との交流「関東圏FD連絡会」

平成21年度より青山学院大学、法政大学、立教大学、東洋大学のFD担当者が集まり、同規模の私立大学が抱えるFD活動の問題解決と情報収集を目的とした意見交換会を開催しております。

今年度より新たに学生FDスタッフも各大学から集まり、学生も交えたFD活動を推進しています。

第6回

日時：2011年5月11日（水）16：00～17：30

参加者：青山学院大学、法政大学、立教大学、
東洋大学のFD担当者 計13名

概要：① 各大学におけるFD活動状況報告

② 「関東圏FD学生連絡会」

「首都圏FD学生・職員・教員連絡会」について

③ 「関東圏FD連絡会」の運営について

社会学部におけるFD活動「初任者研修」

「FD推進にも不可欠な人の和～宿泊型初任者研修で再確認～」

社会学部FD委員長・メディアコミュニケーション学科 教授 信太 謙三

学生にとってよりよい授業を提供することは教員の責務であり、努力目標でもある。そして、本学教員も、私の知る限り、全員がそのためのさまざまな工夫をこらし、日夜、努力を続けている。が、教育は本当に難しい。教育効果は何もすぐにでてくるとは限らない。勿論、技術を習得させ、就職に直結する授業は悪くない。しかし、教育とはそれだけではないはずだ。この中で、よりよい授業がいったい何なのかを探していくのが、ある意味、FD活動でもある。自分の経験だけに頼っているのは必ずしもいいことではない。

社会学部FD委員会は青木辰司学部長の呼び掛けで5月7、8の両日、東洋大学熱海研修センターで第1回教員初任者研修会を実施した。宿泊型の学部主催FD研修会は本学において初めての試

み。参加したのは着任1～3年目の教員と学部FD委員会のメンバーのほか、青木学部長、各学科主任、教務課の鈴木課長(教務部次長)、深澤課長補佐、鈴木主任の合計18人。実は、教員や職員の方々は結構、多忙で、泊まり込みで多くのメンバーを集めるのは容易ではない。遅れての参加や早期の帰宅もあったが、よくまあ18人も集まってくれたものだと感謝している。

初日の7日は、午後3時にセンターに集合後、直ちに研修会に入り、青木学部長がまず、新任の先生方に歓迎の意を表明し、「社会学部に外部からの風を送り込んでほしい」などと訴えた。その後、深澤課長補佐がパワーポイントを使用し、「職員からみたFD」と題して約1時間にわたり講演。「FDとは何か」について自らの体験を交えながら説明し、教員と職

員が協力して組織的に本学の教育の質を高めていく必要性を強調した。また、これを受け、新任の先生たちから「着任教員からみた東洋大学」をテーマにそれぞれお話を伺った。さらに、多くの教員・職員が夕食後も一室に集まり、FDについて熱心に語り合った。

8日の2日目は、早朝からスタート。午前10時半すぎ、青木学部長が本研修会について総括し、全員で「今後も教職員が協力しながらFD活動を推進していく」方針を確認し、同10時50分、研修会を終えた。内容は本当に濃かったと自負している。そして、なによりの副産物は参加した教員と職員の絆が深まったことだ。FD活動の推進にも人の和は不可欠。今回の研修会の成果は必ずやでくと確信している。

社会学部版「宿泊型FD」が実施されるまで

社会学部教務課 課長補佐 深澤 博

学部教員と仕事をする側からFDを考えた場合、「教員が多様化する学生に対し教育指導・教授法に関する不断の研究を行なうこと」は、日常行なわれるべきものと考えます。現状はどう行なわれているか、幾人かの教員へ日頃の授業運営を聞けば、出席学生へ授業終了後にアンケートを実施し、学生の理解度を把握した上で、次回の授業へ理解不十分な点を補うべく教授法を工夫すると、回答がありました。しかしながら、個々の取り組みが、教員間あるいは教職員間で共有できていない点を否めず、組織的に動いていないFDをどのように学部の活動へ進展させるか、私に与えられた課題でした。

委員会形式をとり、会議室で授業運営を協議することも、ひとつの方策にちがいません。しかしながら、時間の制約がある中、肩肘張った会合よりも、自由闊達な雰囲気で見聞交換の場が設定できないかと考えていた矢先、学外研修で出会った言葉が「Faculty Development」と「Food&Drink」でした。かねがねFDを積極的に展開したいと言っていた学部長へ早速報告。学

部長と事務局が幾たびかの話し合いの末に辿り着いた結論が、1)必要なときに誰もが参加できる空間を作ること 2)教職員がカリキュラムやシラバス等の学部運営について自由に話し合える場を設けること。紫煙を煙らせるもよし、教職員がコーヒーカップ片手に語らいアイデアを紡げる活動を目指そうとなりました。こうして今年度の学部FDがスタートしたわけです。

今回、社会学部が行なった宿泊型FDは、上記活動方針の2)にあたります。社会学部の懸案であるセメスター制導入問題にも触れました。実施にあたってのメリット・デメリット等を話し合い、「セメスター制導入にメリットを感じない」という意見があったものの、「すでに社会学部では、(春学期と秋学期に分けて評価する)緩やかなセメスター制が既に始まっている」との指摘も出、「セメスター制は“知識の切り売り”といった印象で反対だったが、考えが変わった」などといった意見が表明されました。セメスター制導入にむけ、確かな手応えを感じた話し合いになりました。

カリキュラムを通して複数の教員が

関わっている教育活動に端を発し、第1回社会学部版「宿泊型FD」が終了しました。私がこれまで参加した私大連フォーラムや大学コンソーシアム京都の講演会で、宿泊型FDの実践報告があがっています。FDを理解・活動するにあたり、いいものは「学ぶ、まねる、捨てる」。時間と手間ひまがかかろうとも、教員と職員が「その気」になって推し進め、理解者、賛同者を募っていく。これ以外に道筋はないというのが、私なりのFDです。



第1回学長フォーラム「東洋大学の国際化」

開催日時：平成23年7月9日（土） 13：30～18：10

場 所：白山キャンパス6号館6310教室

●プログラム

開会挨拶	竹村 牧男（学 長）
グローバル化人材育成の現状と課題および文部科学省の政策	佐藤 邦明 氏（文科省高等教育局 高等教育企画課 国際企画室専門官）
競争的環境下における大学国際化と組織のあり方	芦沢 真五 氏（明治大学 国際連携機構特任教授）
東洋大学の国際化の現状と課題	竹村 牧男（学 長）
国際地域学部での国際化について	藤井 敏信（国際地域学部長）
経営学部における英語教育のあり方	旭 貴朗（経営学部長）
福祉・健康・デザイン領域の国際交流と研究	古川 孝順（ライフデザイン学部および福祉社会デザイン研究科教授）
ディスカッション	
閉会の挨拶（総括）	神田 雄一（副学長）

「第1回学長フォーラムを開催して—東洋大学における国際化の現状と課題—」

学 長 竹村 牧男

平成23年7月9日、第1回学長フォーラムを開催した。これは従前、丸一日かけて行われていた全学プレゼンテーションを改め、今日の本学に重要な課題と目される特定のテーマを掲げ、外部講師もお招きして全学で広く議論しようという趣旨の下に設定したものである。

第1回は、「国際化」をテーマとし、文科省国際企画室専門官の佐藤邦明氏、明治大学国際連携機構特任教授の芦沢真五氏のご参加をいただき、順に「グローバル人材の育成と文科省の政策」、「大学の国際化とその評価方法」について講義をいただいた。さらに私の本学国際化の現状と課題についての発表のほか、国際地域学部の国際化、経営学部の英語教育、ライフデザイン学部および福祉社会デザイン研究科の国際交流の取組についての発表がなされ、その後、ディスカッションを経て閉会した。

佐藤氏は、豊富なデータ・情報をもとに、日本の若者が必ずしも内向きとは言えず外へと向く先が多様化していること、グローバル人材育成については文科省・経産省のみならず官邸が真剣であること、などを指摘され、さらに国際化展開に対する助成金の動向を詳しく紹介してくださり、大学に対しては英語に関

する入試の改革、インターンシップの推進を訴えられた。芦沢氏は、特に国際化にかかる組織や教育プログラム等の評価の方法論についての研究成果を発表され、学生の海外体験・留学体験等の評価の指標の必要性等を指摘された。配付された「大学国際化指標（チェックリスト）」は非常に詳細なもので、本学の今後に大いに役立つものと信じている。

本学は、2012年の創立125周年を迎えるにあたり、特に「国際化・哲学教育・キャリア教育」を3本柱に掲げ諸施策を進めることを決定しており、グローバル人材の育成を重視している。一方、実社会にかかわる人の話を聞いても、近年多くの企業等が急速にグローバル化を意識し、グローバル人材を求めるようになってきているとのことである。企業のボーダレス化もますます進展している現代社会において、その社会に順応しえてしかもより豊かで公正な社会の実現に取り組める人材を育成していくことは、今日の大学の重要な使命である。

本学は、これまで国際化を大いに展開してきたと言い難い。そのことは留学生の派遣・受入状況にも表れており、国際化は喫緊の課題である。ただ、国際化という掛け声の中で重要なことは、大学



の教育・研究活動を国際基準に適合したものとしていくとともに、何よりも本学学生の国際感覚、国際的活躍能力、グローバル化した社会において生き抜いていく力を十分に涵養していくことである。今後の社会に生きる人間として必要な力は、基礎学力および専門能力に加え、社会人基礎力、語学力、異文化理解・活用力、伝統文化理解・発信能力などであり、学生が自らそれらの力を伸ばしていくことができるように、学部・学科は組織的に真剣に取り組んでいかなければならない。国際化は、時代に適応した教育改革を強力に推進することにもほかならぬであろう。その意味では、今回いくつかの学部等から発表のあった、さまざまなゼミ活動・研修活動・語学教育の改革等々の事例は、本学全体にとって大いに参考になるものであった。

全体を通じて、外部講師のご講演の刺激もあり、全学的にあらためて国際化に取り組む意思を確認しえたのではないと思う。その意味では、有意義な会を持つことができたと考えている。本フォーラムの開催に種々ご尽力・ご協力くださった方々に、心より御礼申し上げる次第である。次回は、より広範な参加者を得て、さらに活発な議論を展開できる場に行きたいと思うのである。



TOEIC指導者向けワークショップ/英語教育担当者向け研修会

開催日時：平成23年7月10日 9:00～17:00

場 所：白山キャンパス第3会議室

本学では、グローバル化した現代社会における大学の役割として国際化の促進を目標に掲げ、今年度より取り組みの一つとして英語教育の充実を図っております。

今回は財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会の講師であるSusan Hines氏 および David P. Anderson氏のご協力を得て、東洋大学および附属高校の英語教育担当者30名を対象に、英語の教授法を学ぶためのワークショップを開催しました。

●プログラム [Propell Workshop for the TOEIC Bridge Test]

- Workshop Objectives and Gallery Walk
- Learning Objectives
- About the TOEIC Bridge test
- Teaching and Learning Strategies
- Score Descriptors and Can-Do Statements
- Teaching and Learning Strategies
- Learning Activities
- Assessment for Learning
- Evaluations and Closing



参加者の声

●TOEIC Bridgeワークショップの感想 経営学部GBC (Global Business Communication Course) 担当

准教授 新井 恭子

TOEIC Bridgeは、近年大学でも学生に受験を勧めているTOEIC (The Test of English for International Communication) への架け橋として、基礎的な英語コミュニケーションを検定する試験である。現在大学では、主に入学時の英語習熟度を測定し、クラス分けテスト(プレースメントテスト)に使用されることが多いが、英語を使って仕事をするを前提とした英語力の試験であるTOEICより、一般教養的な英語を学習させたい場合は、大学1年生、2年生対象にも利用する大学、学部もある。本学では、経営学部はプレースメントテストに、総合情報学部は1年生の秋学期終わりの習熟度測定テストに利用されている。

今回のワークショップは、TOEICとTOEIC Bridgeのテスト開発を実際に行っている、アメリカのETS (Educational Testing Service) より2名の開発者が来日し、講師として担当したので、テストング技術や、開発理念を直接聞くことができ、たいへん貴重な経験となった。

ワークショップの主な内容は、「どのようにして受験対策の授業を組み立て指導するか」を学ぶものであり、生徒のレベルの判断方法や、目標の立て方、評価の仕方など、非常に具体的な指導方法の説明があり、それらは、TOEIC Bridge対策授業のみならず、一般の英語の授業でも応用できると受講者からたいへん好評であった。

ワークショップ形式であったので、受講者も積極的に参加することが求められ、ほとんどが教員であったので、誰もが、久しぶりに生徒側の立場に立って新鮮な気分を味わったと言っていた。また、講師の2人の冗談を交えた講義が楽しく、グループワークも和気あいあいとした雰囲気で行われた。

余談であるが、受講生は本学の専任・非常

勤の教員と、附属高校の英語教員の参加もあったので、高校の英語教育から大学への教育へとどのように繋ぐかや、日頃の英語教育についての意見交換もでき、たいへん有意義なワークショップになった。是非、また、このようなワークショップを開催していただきたいと思った。

●Make the best use of the TOEIC Bridge Test ~the TOEIC Bridge Testの活用法を探る~

京北中学校・高等学校 英語科主任 中島 徹也

数ある英語教材の中で、提供して頂いたETS社の教材の活用法の可能性を感じました。

特に、Can-Do Guide に従い、何ができていないから、このスコアに向かうために、何をすべきなのかが明確に書かれていて、さらにその教材もあるというのは、教える側と学ぶ側の双方に有益なものであります。授業での活用方法に関しても、いくつか実際にグループワークにて参加してさらにその可能性を感じました。

実際には、現在「グローバル人材の育成」が叫ばれている中で、こういうことが出来る、という明確な英語の基準があるのは企業にとっても魅力的に映ると思います。

その一方で、教育現場での活用方法にはまだ課題がいくつかあることも痛感せざるを得ませんでした。

- ①英検、GTEC などの他の検定試験との両立。
- ②TOEICの授業を ALL ENGLISHで実施するための教員の質の向上。
- ③中高6か年での開始時期。

以上のような項目を、今後の英語科会の検討項目に盛り込ませていただいて、より有益な活用方法を見出していただければと考えております。

●TOEICワークショップに参加して

東洋大学附属姫路高校 豊山 恵美子

今回のワークショップでは、アメリカのETS(TOEICの出題者)から講師の先生が来られ、TOEICの前段階であるTOEIC

Bridge testの紹介とその有用性についてのお話を伺いました。今回のワークショップでは、アメリカのETS(TOEICの出題者)から講師の先生が来られ、TOEICの前段階であるTOEIC Bridge testの紹介とその有用性についてのお話を伺いました。TOEICで必要なリスニング力・リーディング力の向上にむけて、どのような英語活動をすればよいのか、他校の先生方の授業実践例を聞いたり、グループ・ディスカッション等を通して、英語教育全般について意見交換ができ、新任の私には大変参考になりました。TOEIC試験導入に関しては、これまでは英検や漢検が大御所のように感じていましたが、東洋大学が全学部をあげて国際化の推進を図っていると聞き、子どもたちが社会人になった以降のことも考えると、今からTOEIC試験などに挑戦させてみるのも、一つの試みではないかと感じ始めました。この研修を受けて、TOEICの意義を学んだと同時に、英語教師としての在り方も学びました。研修に参加させていただいたこと、感謝しております。”Not sage on the stage, Guide on the side!”

●Propell Workshop for the Toeic Bridge Testに参加して

東洋大学附属牛久高等学校 小澤 幹生

先日はTOEIC Bridgeのワークショップに6名の牛久高校教員を参加させて下さり、ありがとうございました。TOEICの問題作成に関わっている講師の方々による有益な講習であったのみならず、大学・姫路・京北の先生方との交流も深めることができたのは、今までにない貴重な経験でした。本校では2005年度より、附属推薦合格者に対して、合格決定後の学習意欲保持と大学入学に向けての事前学習のために、TOEIC L&RのIP受験を課して指導してきましたが、今後もTOEIC Bridge、TOEIC S&Wも含めて、効果的な導入方法、よりよい指導方法を模索し、生徒の英語力向上に役立てたいと思っております。

学外FD関連研修会参加レポート

私立大学連盟主催「平成23年度 FD推進ワークショップ（新任専任教員対象）」に参加して

経営学部経営学科 講師 安則 貴香

8月8・9日(A日程)および10・11日(B日程)、グランドホテル浜松にて、新任専任教員を対象に、以下のスケジュールによって開催されました。

1)全体説明

FD推進ワークショップ運営委員会委員長である圓月勝博教授(同志社大学)による基調講演が行われ、日本私立大学連盟の沿革、本ワークショップのテーマである「大学教員の職能開発とFD」の目的とその役割について述べられました。参加者自身が高等教育機関に勤務するプロの教員であるとして、大学あるいは分野ごとの教育目標の多様性を理解しながら、参加者自身の職能開発の重要性を認識するものでした。

2)パネル・ディスカッション

昨年度FD推進会議(本年度からFD推進会議を推進ワークショップと改名)に

出席した3名の教員による各大学のFDの取り組みが紹介され、参加者との活発な意見交換がなされました。

3)グループ活動(グループ討議・模擬授業)

1日目後半から2日目はそのほとんどがグループワークに時間が費やされました。グループ討議では、各グループに別れて、自己紹介・各教員の大学・授業に対する問題点・解決策などの意見交換がなされました。2日目は模擬授業ワークショップ(模擬授業15分・質疑応答15分)を中心に、前日に作成した模擬授業のワークシートに沿って授業が行われ、今後の授業改善に向けてのディスカッションがなされました。

4)全体のふりかえり

各グループでの模擬授業ワークショップで討議された内容を報告し、良い授業とは何か、どのように改善すべきなのか

等の意見交換がなされました。

【FD推進ワークショップを振り返って】

私が所属したグループ教員の専門分野は、神経科学、神道学、計算機科学、社会福祉、英語教育、経営学、舞踊学と多岐にわたりました。各教員による15分間の模擬授業は非常に新鮮で、授業内容もさることながら、授業方法、話術、板書の書き方、構成方法等に改めて気づく点が多く、また異分野でも授業を行う基本姿勢、方法論等に多くの共通点が見られ、今後の授業改善に向けて非常に役立つものでした。教員の立場である今、自分が学生の立場になって授業を拝聴する機会は非常に少なく、本ワークショップで自分の授業を客観的に捉える重要性を改めて認識する機会となりました。教育の質の向上のためにも、多くの新任教員の方々に是非参加して頂きたいと思います。

私立大学連盟主催「平成23年度 FD推進ワークショップ（専任教職員向け）」に参加して

通信教育課 課長補佐 榊原 康貴

平成23年6月25日(土)、TKP東京駅日本橋ビジネスセンターにて開催された平成23年度FD推進ワークショップに参加した。

1)問題提起

同志社大学の圓月勝博教授より、「見えないFDから見えるFDへー職能開発の内部質保証システムの構築を目指してー」と題する講演があった。FDの理論化および専門化が進んだ現在、FDの専門部署の設置の有無や、FDの専門家と一般教職員との間でFDに関する知識・情報の格差が発生していることを指摘し、特にFD活動自体の「目的」を明確にする必要性を説き、さらに①職能開発の内部質保証システムが機能しているかどうか、②教育情報の公開義務に即した学生が理解できるシラバスを書くこと、③成績評価の脱ブラックボックス化の必要性等を提示された。

2)グループ討議

A～Lの7～10名程度のグループに分かれ①「自己点検・評価報告書」のFD関連箇所を点検評価する、②各大学の独自の取組について情報交換をした。私のグループでは、学内の組織間連携や担当者の経験不足から生じる課題が多くあげられた。一部の大学ではIR機能を持たせた部署の設置など積極的であるが、例えば教務や就職・キャリア支援などの経験がなく、せっかくある情報や調査結果などが分析しきれていないという実情や、授業評価などの位置付けや必要性についてもさまざまな課題が共有されたが、結論として「学生のために」という視点を持ち続けることが重要であると導き出された。

このワークショップに参加して、「FD活動は大学経営の根幹である」と感じた。大学としてミッション・ポリシーの実現は授業を通じて具現化されるべきものであ

り、授業評価は「顧客たる学生」の満足度を図る指針であるにとらえると、「教材たる授業」が適切に運営されているかどうかをサーベイするまたとないチャンスである。しかし、現状、多くの大学はFD活動を半ば強制的に「させられている」という感覚を多く待っている。冒頭、圓月先生が引用された立教学院本部調査役・東京大学名誉教授の寺崎昌男先生の「目的なければFDなし」という言葉が思い返される。FD活動の目的以前に、大学の社会に対する目的は「教育機関として学生を育成すること」以外他ならない。具体的な提案のレベルには至らないが、如何に自発的にこうしたFD活動を学内に定着させていくかが、今後の大学経営においてきわめて重要な課題であることを認識することができた。ともするとFDは「教員の問題」ととらえられがちであるが、認識を新たに、自らの襟を正したいと思う。

「IR機能の強化策——インフラと組織体制の実際」に参加して

社会学部社会心理学科 教授 杉山 憲司

IRはInstitutional Researchの略で、機関の計画立案、政策形成、意思決定を支援するための情報を提供する目的で、高等教育機関の内部で行われるリサーチ(Saupe,

1990)と定義されます。

船守美穂(東京大学)氏は基調講演で、日本型IRとして、全学目標・計画の策定・フォローアップ、法人評価・認証評価対

応、自己点検・評価とPDCA、教学IRと学生調査・卒業生調査(教育の質保証、達成度、満足感など)、入学者管理(アドミッション・奨学金・大学残留率など)、その他(施

設・空間利用状況・編入状況)が強調されていると述べ、課題として、学内情報基盤システム、IR職員研修プログラム、IRのリサーチ・クエスチョンの具体性、等があり、IRは何よりも合理性・客観性をもって大学の運営改善につなげることが重要、と結んでいました。

工藤一彦(芝浦工業大学)氏は、PDCA化とIR体制による教育の質保証(文科省GP選定)という工学リベラルアーツ教育を事例に、カリキュラムマップ、出口調査・科目提出物、学生の自己評価、ルーブリッ

ク、カリキュラム全体の設計思想の重要性、それに加えて、3つのポリシーの明確化による教育の質保証の重要性を強調していました。

稗田隆(岡山大学)氏は、大学情報の一元化が重要で、700項目のデータ分類から始めて、独自の大学情報データベースを構築し、担当部署である情報統括センターの目的は、情報戦略の企画・立案、情報基盤の整備・運用並びに大学の諸活動に関する情報の収集・整備及び役員等への提供を通じて、大学の教育研究その他

業務の高度化及び円滑な遂行に資することであると述べ、データは集めれば強くなるし、必要なデータの7、8割は手元にあるとの発言が印象的で、学士力評価チャート、入試情報の見える化システムが紹介され、参加者から賞賛を得ていました。

セミナーに参加した動機は、“授業改善・学習アウトカム評価・認証評価・教育情報公開”をサポートするデータベースとしての教育IR戦略について知ることであり、多くを学ばせて戴いた。

学びとキャリアの架橋はデータと実践からー「大学生研究フォーラム」に参加してー

経済学部総合政策学科 教授 今村 肇

就活が成功して就職後の所得水準も高い人はどんな学生時代を送っているでしょう。

このフォーラムでの報告では、「学習・読書もネット・マンガも友達・サークルもまんべんなく時間を使う学生は全体のたった15%弱、逆にいずれにも時間を使わないという強度に不応型の学生がなんと全体の46.2%もいる」という衝撃的な結果に出会いました。また、さらに興味深いのは、「大学3年時に異性の友達と交際した時間は、卒業後2年目の収入と直線的に関連していた」というのが統計的にいちばん有意な結果だったということです。そのほか、大卒2年後の収入が高いのは、大学3年時に同性の友達との交際、クラブ・サークル活動、コンパや懇親会への参加などに時間

を使っていた人…。

「現代大学生の学びとキャリアをデータと実践を架橋して理解する」と題されたこの「大学生研究フォーラム」は、FDに関心のあるみなさまにはおなじみの京都大学高等教育研究開発推進センターと電通育英会との共催で毎年開催されていて、データと実践を通したいへん興味深い知見を提供してくれる貴重な機会です。このフォーラムや大学生のキャリア意識調査について詳細を知りたい方は「電通育英会」のホームページをご覧ください。

おおかたの大学で行われている、自己分析、会社研究、ES指導、面接対応といった手とり足とりのキャリア形成支援は効果がないどころか若者が社会に出て迷走する原因を作っているのではないかと、もっと

言えば、社会を支えるという「市民」意識が育たないまま消費者的ニーズのみ肥大した「顧客」を抱える追い詰められた大学の窮状を、参加者たちはあらためて共有いたしました。

それでは東洋大学として何をしたらいいのか、私はそれを解く鍵は「ムーミン」にあると思います。「世界一幸福」といわれる北欧の国々のキーワードは、シティズンシップ、コミュニティーなどですが、ベースは「対人能力」のたゆまぬ育成の努力にあります。既製の慣習に頼らずみんなでゼロからボトムアップでものごとを作り上げていく「リレーショナル・スキル」が日本でも求められ、実はそれがすでに就活に結果となって現れていることを確認したフォーラムでした。

「学生FDサミット2011夏～大学を変える、学生が変わる～」に参加して

学生FD研究チームリーダー 曾根 健吾 (文学部教育学科3年) 副リーダー 関根 美祈 (生命科学部研究科1年)

8月27日(土)・28日(日)の2日間、立命館大学で開催された「学生FDサミット2011夏」に本学から学生6名、教職員2名が参加した。本サミットは今回で4回目の開催になるが、過去最大の約270名の学生・教職員が全国から集まった。このことから、学生参画型FD活動への関心がさらに高まっていると言えるのではないかと思います。

「学生FDサミット」は、立命館大学の学生FDスタッフが中心となって企画・運営を行っている。各大学におけるFDへの取り組みについて報告し合い、大学教育・大学生活をよりよくするための議論をし、学生FD活動の輪を広げていくねらいもある。

1日目は、午前のオープニングイベントとして、芝浦工業大、東洋大学、横浜国立大学、愛知教育大学、広島経済大学、明治国際医療大学による学生FD活動の取り組みに関する発表があった。私たちは研究チームが本学で取り組んでいる交流会(しゃべり場)の開催、先生インタビュー～駅伝リ

レー～などの活動紹介と広報活動や持続可能な組織作りなどの課題について紹介した。昼食時は15・16人のグループに分かれてアイスブレイクとしてゲーム形式の自己紹介を行った。午後からは事前選択した3つのテーマ(①どんな授業がいい? ②大学で何がしたい? ③課外活動って必要?)について、10人程度のグループで議論をした。

2日目の朝は「あなたの悩み解決したらか」と題し、学生FD活動に関して抱えている悩み・質問に、参加者の方からアドバイスを頂く新企画が行われた。「ミーティングの頻度・日程の決め方はどうしているか? 自分の大学の推し活動があれば教えて欲しい? スタッフ不足! どうすれば新スタッフが増えるか? 学内でFDの知名度をあげるにはどうしたらよいか? 活動の内容を旨く広報するにはどうすればよいか?」などがあげられた。午後からはテーマごとにコンペを実施して代表グループ

を選出した後、代表グループが全体で発表を行い、活発な質疑応答が行われた。最後に、木野茂教授(立命館大学共通教育推進機構)より、「授業を良くしたいなら受け方を変えれば授業は変わる」と総括があった。

学生として今回が2回目の参加であったが、改めて全国で学生FD活動が広がりを見せていることを目の当たりにする良い機会であった。私たちの活動の意義を考え直すと共にこれからも本学で更に学生FD活動を進めていこうという刺激を大いに受けた2日間であった。学生FD研究チームでは参加して学んだことを励みにし、本学での取り組みに生かしていきたい。



テーマ別グループワーク発表

平成23年度 東洋大学FD推進センター活動報告

(平成23年3月～8月)

FD推進委員会

◆第5回 (平成22年度)

●日時: 平成23年3月19日(土) 10:00～12:00

報告1 各学会活動状況報告

報告2 各学部・研究科・大学院における2010年度秋学期FD活動状況報告

報告3 センター長報告 ①学生FDサミット2011 春

②学長からの諮問事項について

協議1 第Ⅱ期FD推進センターFD推進委員会活動報告と課題の抽出

協議2 学生による授業アンケートの全学的取扱いについて

◆第1回 (平成23年度)

●日時: 平成23年4月23日(土) 10:00～11:55

はじめに (1)FD推進センター長の挨拶

(2)FD推進委員会委員の紹介

(3)平成21～22年度FD推進センター活動報告

報告1 平成23年度ティーチング・アシスタントFD研修会

審議1 平成23年度FD推進センターの活動方針について

審議2 部会の設置について

審議3 部会長の選出及び委員の各学会への配属について

審議4 平成23年度新任専任教員FD研修会の開催について

協議1 学生による授業アンケートの全学的取扱いについて(意見交換)

協議2 平成23年度FD推進センターの活動スケジュールおよび委員会の運営について(会議日、連絡方法等)

◆第2回

●日時: 平成23年5月28日(土) 10:00～11:45

報告1 各学会活動状況報告

報告2 センター長報告 ①2011年度 第6回関東圏FD連絡会について

②学生FD研究チームの活動について

③TOEIC指導者向けワークショップの開催について

協議1 学生による授業アンケートの全学的取扱いについて

協議2 平成23年度一般教員FD研修会と第4回授業改善事例シンポジウムの合同開催について

協議3 FD推進センター発行の刊行物について

◆第3回

●日時: 平成23年7月16日(土) 10:30～12:30

報告1 各学会活動状況報告

報告2 センター長報告 ①学生の成績評価「GPA制度」の導入について

②学生による授業アンケートの全学的取扱いについて

③関東圏FD連絡会学生FDスタッフについて

④学生FD研究チームの活動について「しゃべり場第2回」

⑤TOEIC指導者向けワークショップについて

協議1 平成23年度一般教員FD研修会と第4回授業改善事例シンポジウムの開催について

協議2 公開授業の実施について

研修部会

◆第1回 (平成23年度)

●日時: 平成23年5月7日(土) 10:00～12:00

議題1 平成21～22年度研修部会の活動報告

議題2 平成23年度TA研修会について

議題3 平成23年度新任専任教員FD研修会について

議題4 平成23年度の研修部会活動計画について

大学院部会

◆第1回 (平成23年度)

●日時: 平成23年5月21日(土) 10:30～12:00

議題1 平成21～22年度大学院部会の活動報告

議題2 平成23年度の大学院部会活動計画について

授業改善対策部会

◆第1回

●日時: 平成23年5月14日(土) 14:00～15:00

議題1 平成21～22年度授業改善対策部会の活動報告

議題2 平成23年度授業改善対策部会活動計画について

◆第2回

●日時: 平成23年6月11日(土) 11:00～12:30

議題1 学生の成績評価の検討「GPA制度」の導入について

議題2 第4回授業改善事例シンポジウムについて

議題3 公開授業の実施について

議題4 教員の教育業績評価の検討について

授業評価手法検討部会

◆第1回

●日時: 平成23年5月14日(土) 15:30～16:30

報告1 メール会議の結果について

審議1 全学共通の授業アンケート項目とフィードバックシステムの開発について

◆第2回

●日時: 平成23年7月2日(土) 11:00～12:30

議題1 授業フィードバックアンケートの全学共通項目の検討

編集部会

◆第3回 (平成22年度) メール会議

●日時: 平成23年3月3日(木)～3月12日(土)

議題1 平成22年度編集部会の活動報告と課題の抽出

審議1 全学共通の授業アンケート項目とフィードバックシステムの開発について

◆第1回 (平成23年度)

●日時: 平成23年5月28日(土) 9:00～9:50

議題1 平成23年度編集部会の活動報告

議題2 平成23年度編集部会活動計画について

◆第2回

●日時: 平成23年6月25日(土) 10:00～12:00

議題1 FDハンドブック(改訂版)の刊行について

議題2 FDニュース第7号の刊行について

議題3 FD推進センター報告書の刊行について

学内公開活動

平成23年度 ティーチング・アシスタントFD(Faculty Development)研修会

●開催日時: 平成23年4月16日(土) 14:00～16:30

●会場: 白山キャンパス 6号館6210教室

●参加対象: 平成23年度春学期採用のTA

●参加人数: 約80名(欠席者はワークシートに取組み、録画映像を視聴しアンケートに回答)

平成23年度 新任教員FD研修会

●開催日時: 平成23年6月11日(土) 14:00～18:30

●会場: 白山キャンパス6号館6203教室

●参加対象: 平成23年度新任専任教員(非常勤講師は自由参加)

●参加人数: 26名(欠席者は録画映像を視聴しアンケートに回答)

TOEIC指導者向けワークショップ/英語教育充実のための担当者研修会

●開催日時: 平成23年7月10日(日) 9:00～17:00

●会場: 白山キャンパス第3会議室

●参加対象: 英語教育担当の大学教員および附属高校の教員

●参加人数: 27名

平成23年度

東洋大学FD推進センター活動計画 (平成23年9月～平成24年2月)

学内公開活動

平成23年度 一般教員FD研修会・第4回授業改善事例シンポジウム(合同開催)

●開催日: 平成23年11月26日(土)

●会場: 白山キャンパス 6号館(教室未定)

平成23年度 公開授業

●開催日: 平成23年秋学期

●会場: 未定

平成23年度 学部FD活動状況報告会

●開催日時: 平成23年12月(予定)

●会場: 白山キャンパス 6号館(教室未定)